

吟味役は馬に乗るなり、供をしたがえて熊駅に向って去ってしまいました。

一言の弁明べんめいの余地もあたえてもらえなかった助宗は、落館おちだての丘にたつて無念の涙をたたえながら去って行く一行を見送りました。

散りのこった枯葉をふき散らすしぐれ模様の日だったと云われています。

その夜、新妻助宗は責任をとって堤の丘の上で切腹して果てました。

堤の恩恵をうけた數十人の里人は、切腹した堤の丘に小さな祠ほこらを建て、助宗が死んだ日を祭日と定め、赤飯をたいて永く助宗の霊を慰めました。

そして堤の名を助宗の堤、祠を助宗明神と呼んできました。

旧正月の十五日こそ助宗切腹の日であり明神の祭日なのです。

〈第七話〉

はなどり地蔵

熊の町の地は早くから開けたところで、奈良朝ならの御代みよに浜海道を官道として整備した時に、日